

誰かを守りたいと化け
物は言った

蓮山

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二度目の転生を果たした「化茂野 真翔」

その個性はヴィラン寄りだった

「たとえ化け物だとしても誰かを救えるヒーローになりたい」

これはさび付いた正義感を持つ少年が正義のヒーローになる物語
できれば低評価の理由はください…

目次

プロローグ 化け物からヒーローに

1

N o. 1 ドラゴンの卵 | 8

N o. 2 個性の把握 | 16

N o. 3 校長先生と化け物 | 25

N o. 4 スマブラ的不利 | 31

N o. 5 防衛戦の方が大体有利

36

N o. 6 個性って生活に制限がかか

ることもあるね | 40

N o. 7 ワザップ真翔 | 48

N o. 8 開幕ブツパこそ至高 | 53

N o. 9 季節に關したことはしない
p 主 | 61

プロローグ 化け物からヒーローに

「ヒーローになりたい」

子供のころ、抱いた憧れは大人になるにつれ現実を知り薄れていくものだ。

かくいう俺もその一人。だった。

ある春先のこと。俺は学校から帰る途中で正義のヒーローごっこをしている子供たちが道路に出た瞬間を見た。

とてもありふれたことだ。ただの日常の一コマ、いやそれ以下かもしれない。

ただ、普通の日常ではありえない、小説の世界でのテンプレートが起きてしまった。

子供たちに車が迫っていた。そのとき何を思ったか、いや、きつと胸にくすぶつていた無駄な正義感が働いた。その結果がこのざまだ。

熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い

車にひかれたのだ。

意識が薄れていく。

死というものはこんな苦痛を伴うものだったなど、変なことを考えてしまっている自分がいた。

「フハハツ…結局、何もなすことも誰かのために正義感を働かせて誰かを救ったりもできなかつたな。とても、滑稽というかなんというか…無味乾燥でとても真つ白の人生というか」

こんなことならもう少し誰かに興味を持つべきだったか…

いや、

「ちがうか…夢をもつてこの世界に転生するべきだった」

俺は一度転生している。この世界は特に心躍るような背景もなかったから転生特典ももらっていない。

確か転生特典で最も適性があつたのは「化生変化」だったか？俺の中で最も強かつた思ひは誰かを守る化け物になりたいなんて言う意味が分からないものだったから適性があつたらしいがそんな変な思ひが俺にあつたのか？

まあこの世界では使えないような特典だ。それに嘆いても意味はない。どうせ次はない。あれは神の気まぐれ、そう言われたし俺もそう思う。

うん？なんかうるさい。ああ、俺がひかれたからか…

そうだよな。人がひかれたら騒ぐだろうな。

変に冷静だ。もう少しで死んでしまうからか

「うる…さいな…少し…黙ってくれ。」

そしてまた俺は死んだ。

「なあ？俺死んだよな？またか？」

「はい、まあそうなりますね。」

「なぜに？次はなかったはずだが。」

「今回も神の気まぐれですね。」

俺の質問に答えるのは声だけだ。姿は見えないし周りは黒一色

「…もしかして神って暇か？」

「…暇なのは一部の上級の神々ですよ。私としては早く転生特典を受け取ってもらってこんな仕事より別のことをしたいのですが…」

「…転生特典をもらわない限りお前はこの仕事が続くのか？」

「良くわかりましたね…ええそうですね。さあさあ早く。さあさあ」

「お、おう」

思わず了承してしまった。

「次の世界はどこだ」

「喜んでください。特典を存分に振るえる世界です。ヒロアカの世界ですよ」

あつやばいほうの世界じゃん。思わず素が出るくらい驚いてしまった

あつななんか意識が薄れてきた。文句の一つでも言わなきゃまたおもちゃにされる

「てめっ面白がつてるだろっ！」

「…サアドウデショウ」

こうしてまた神のおもちゃにされた

ヒロアカの世界に転生したが授業の方はあまり前世及び前々世と変わらず。

そのまま市立の中学に入ったが

いたなあ。緑谷と爆豪

さて、中3で同じクラスになったんだがあの人かなり頭いいなあ

そんなことを考えていたらヘドロが暴れてました。

あれ？緑谷のノート爆破されてないのに原作始まって

見に行くか…

あー爆破しまくってる。爆豪が取り込まれてるな

さしてどうしようか

そんなことを考えていたら緑谷を発見したので近づいて話しかける

「よお、緑谷。そんな顔してどうした」

「あ、化茂野君。そのあのえつととつととととととととととととととととととと」

あ壊れた

俺の名前言ってなかったよな？化茂野けものましよう 真翔だ。

「落ち着け。それでどうすんだ？」

「え？どうって……」

「ほらあの敵サイランについてなんか思うことがあるんだろ？」

「そうだけど……なんでわかったの？それに……」

敵を緑谷が見る

「どうにもできないよ。無個性の僕じゃ。」

ああこの目はあきらめられている眼だ。仕方ない

「無個性だから……か。お前はそうやってあきらめたまま生きるのか？そんなのでヒーローになれるのか？よく見ろよあいつを」

「え……？」

緑谷の視界に入ったのは苦しそうな顔の助け手を求めている爆豪だった。

緑谷が走りだそうとするが手をつかむ。

「待て緑谷。そのまま突っ込んでも意味がない。」

「…っ！でもっ」

「だから俺も行く。それならどうにかできる」

「っありがとう」

「それ、行くぞお前が気を引け。出来たら爆豪の救出もしろ」

2人で駆け出す。

緑谷がバツクの中身をぶちまけて視界を奪って爆豪にとりつく。

ヘドロの意識が向いたところで個性を発動する。

「化生変化『天狗』」

天狗に変化し（羽が生えるだけ）天狗としての能力を発動。

風を巻き起こして吹き飛ばす

しかし、一塊に飛ばしたせいか緑谷達にとりつこうとする。

「うわあああ!!」

緑谷が叫ぶ。がヘドロの目的は果たされない。

三人の前に一人のヒーローが現れる

「まったく、なんてことだ。君を論しておきながら君とその友人に先を越されるとは

…っ！私が動かなければなかったというのに！」

「オールツマイトツ」

「プロはいつだって命懸け!!!」
!!!」

『DETROIT SMASH!!』

トツプヒーロー「オールマイト」が右腕を振り下ろす。

すさまじい爆風が周囲を襲い吹き飛ばされそうになる

緑谷達と自分が飛ばされないように踏ん張ったがぎりぎりだった

「すげえ、これがオールマイト」

久しぶりに心が震えた。

これが平和の象徴。これがプロのヒーロー!

心の奥底で炎が燃え盛る音がした

こんなすげえやつになりたい。こんなヒーローになりたい。今更ながら夢を持てた。

だから言おう。

これは俺が、化け物がヒーローになる物語だ。

No. 1 ドラゴンの卵

さて、あの敵の事件から夜が明けて。

怒られた。

まあわかるが……子供が銃を持ったやつを倒そうとしたようなものだ。そりゃ、叱られるわな

しかも片方は無個性で片方は個性の無断使用。

補導されなかつただけましなので甘んじて受けるしかないだろう。

くくくくくくく

「あくめんどくさかつたなあ」

「でも、仕方ないよ。結果的に助かつたからよかつたけど一步間違えればさらに被害が増えていたんだから」

「内定に響かなくてよかつたなあ」

そうなのだ。今年で高校受験。これで将来はほとんど決まるとかなんとか。

いや。この世界では生まれた時点で将来が決まるようなもの、か。

ひどく残酷でやさしい世界なのだと再認識する。できることが最初から決まってい

るのだ。残酷ではあるが、同時にできないことは努力をしても無駄と分かっている。

「緑谷は英雄だっけ？俺はまだ決まってるし俺も受けようかな…」

「う、うん。オールマイトの母校だから受験するならここって決めてるんだ。それに…ほんの小さな光だけ…入れる可能性が出てきたんだ」

「そうか…頑張れよ。お前は心はヒーローの器なんだから」

「え？それって…」

「またな。応援してる」

ここからは俺が介入すべきじゃない。あいつはすぐに成長する。でもそれはここからの努力次第なんだ。十か月後が楽しみだ。

くく入試当日2月26日くく

「よお緑谷。緊張するなあ」

「う、ううううんんん。ソソウダネ」

「おい、落ち着け落ち着け。ほら、ひっひふーひっひふー。って違う！」

「アハハ…そうだね。落ち着かなきゃ…あつ」

落ち着いたと思ったら今度は転びそうになった。

だが、

「大丈夫？」

「えっあれ？浮いてる」

とてもうららかな少女が助けた。

「君の個性か？」

「うん。そうだよおころんじやったら縁起悪いもんねえ。お互い頑張ろう」

「ありがとうございしました。頑張りましょう」

原作と違いきちんとお礼を言えた出久であつた。

そして

すぐくうるさいヒーロー「プレゼント・マイク」のプレゼンが終わつて演習場に来た。
どうやら原作キャラはこのステージにはいないようだ。

居たらかなりの遠慮と配慮をしてポイントを稼ぐことになっていたからストレスが溜まつてしまつただろうな。

確かに俺の夢となつたヒーローにはなりたい。だがそれで原作キャラを一人消すのもどうかと思うのだ。それに

圧倒的な成績を叩き出せば特例として原作キャラ十俺でクラスが編成される可能性がある
ある

傲慢かもしれないがそれほどまでに強力なのだ。俺の個性は

そんな風に考えていたら

「ハイスターター」

そんな声が聞こえたのですぐに飛び出す

「化生変化『天狗』『がしや髑髏』」

空を飛んでロボットどもを見つめる。そしたら上から骨を射出。

どんどん貫いていく。どんどん壊していく。

「悪いが、モブたち。お前らにポイントは与えない。俺のために踏み台になれ」

町への被害は少なくしつつロボットを破壊していく。

「端の方へ行ってみるか。まだロボットはいるだろうな？」

隠れている奴らでも風を感じて骨でオブジェにしていく。

「なんだよあいつ…なんであんな規格外が同じブロックなんだ…」

モブがつぶやく。理不尽を嘆く。

8分が経過した。

もう終盤だが、真翔と同じブロックの受験者はほとんどポイントを稼げていなかった。

そこへ現れる圧倒的脅威。

8メートルほどの巨大ロボ。

0ポイントの仮想敵。

立ち向かうのは得策ではない。しかしそこにとどまった者たちがいた。

いや、恐怖で動けない者たちだ。

しかし、両者の間に壁が突き立つ。

壁を創ったものは異形だった。

黒い翼はところどころ骨が覆っており、その顔は骸骨のマスクで見えない。そして、体のさまざまな場所から骨が突き出ている。足は人のそれではなく猛禽類の足をかたどった骨。

いたるところが骨なのだ。

「ば、化け物」

「ひい、みないでえ」

巨大ロボよりも恐怖を感じる。

それゆえ化け物扱いされる。

ただそれだけの理由で人が離れていく。

それでも、彼は誰かを救う化け物だ。

「あいつは、俺が倒すから、逃げてろ」

巨大ロボに立ち向かう。

未知の化け物対機械の化け物

まずは骨を大量に生成。

巨大な腕にして殴る。

そのあとは骨をばらす。

吹っ飛んだロボに風で加速させた骨を突き立てていく。

それで終わった。

「案外、もろかったなあ。最悪、ドラゴンに変身してプレスで消す気だったが」

これでレスキューポイントも稼げただろう。

すべて打算である。

くく雄英教師陣 side くく

なんだ、あいつは

それが教師陣の感想である。

「ヴィランポイント506ポイント。レスキューポイント62ポイント。合計で568ポイント…。過去に500、いや400を超えた生徒は？」

「いや、いない。それどころか250超えたものすらいない。本当の規格外だ。」

「なんで中3でここまで個性を使いこなして行動力があるんだろうねえ…。しかも見たかい？あの子は町に被害を出さないように力加減していたよ？正直言っただけで教える必要なんてないんじゃないか？」

動揺が広がる。町への被害を抑えようとするのはわかるが中学生でそれができないものなどほぼいない。

「でも僕たちは雄英高校の教師なんだ。学ぶことを望む有精卵たちを立派なヒーローにする。それは相手がドラゴンの卵でも変わらないさ」

「校長……」

「とはいえ、彼とほかの子を比べても意味がない。だから、彼は特別枠として一般入試の枠にカウントしないほうがいいと思うんだ。どうかい？」

〃〃sideout〃〃

合格した。

まあ当然ではある。

数えた限り150体は壊していたからなあ。

確か、爆豪が90ポイントくらいで1位だったからなあ。

化け物とか言われたけどもう慣れてるから精神ダメージは少なかったし、普通に大丈夫だ。

「緑谷。どうだった。行けそうか？」

「……」

「……おい」

「……」

ペシイッ

「……」

見事に死んでますねこれは…

No. 2 個性の把握

なんか…緑谷は入試で出し切った&合格のうれしきで放心中みたいです。

あ、校長に呼び出された。

「ほら、緑谷。呼ばれたぞ」

「…はっ。い、今行くよ」

爆豪がなんかイライラしてるけどたぶん俺らのせいだろうなあ。

あいつは「平凡な市立中学から史上初の雄英合格者」になるっていうのが目標だった
が俺と緑谷でそのインパクトが薄れてしまったからねえ。

「…」 オドオド

「…」 イライラ

なんだこの光景…

「いやーまさかこの学校から雄英合格者が出るとは。しかも3人も」

校長が長々と話したけど上記みたいな内容だったからカットで。

「おら、デク!!ちよつとこつち来やがれ!」

「ヒ、ヒイ!?!」

…連れてかれてら

くくくくくくくくくく

そんなこんなで四月だ。

「さて、行つてきます」

誰もいない家に声をかける。俺に家族はいない。捨てられたけど、まあ顔も知らない親なんてどうでもいい。友人が残した家だからきちんと掃除はしてるがやはり一人はむなししいと思つてしまう。

さて…クラスはI—Aか。主人公クラスだねえ。これは運がよかつたといえるな。

「…」ビシィツ

クラスには一人しかいなかった。

擬音だけでわかるつてすごいな…

「…あく。初めまして。化茂野 真翔だ。よろしく頼む」

「ああ。初めまして。ボ…俺は飯田 天哉だ。よろしく」

真面目メガネだ。

握手を交わす。

「お前早いな…まだ登校完了50分前だぞ？」

「雄英生徒としてこれくらい当然さ。1時間前行動は基本だと思つているんだ」

「…もう少し肩の力を抜いたらどうだ？」

「むっ。しかしな…ここに入学したのだ。模範となるべきだろう」

「肩に力を入れてるといぎというとき全力を出せない時があるからな？少しは抜け」

見た感じ、緊張してるようだから力を抜いたほうがいいと伝える。

「…そうだな。少しは抜くとしよう…」

このあと飯田が趣味やらを聞いてきたからカット。

「(こら)その君！」

「ああん？」

あ、飯田が爆豪に突つかかっている。

ガラッ

緑谷が入ってきたけど硬直した!?

仕方ない…話しかけるか

「おはよう、緑谷」

「あ、おはよう化茂野君」

その後ろにうららか女子！

さらに後ろに寝袋に入った変な人お！

展開は読めると思うのでカットオ！

「個性把握テストね…」

なんか体育館見たら歓迎の準備しまくってただけど…
相澤先生の独断かな。これは…

「おい、化茂野」

「なんですか？」

考えてたらなんか呼ばれた。

「中学のソフトボール投げの成績はいくつだ？」

「え？59メートルですけど」

「個性を使って投げてみる。円からでなければ何しても構わん」

じゃあ鬼と巨人の掛け合わせで…

「化生変化『鬼』『巨人』」

頭に角が生えて肉体が巨大化する。

「キュツとしてドカーン！」

ただの腕力でぶん投げる。

あれ？みんなどうしたの？そんな化け物を見る…って化け物じゃん。俺。

「…まず己の限界を知る。それがヒーローの素地を形作る合理的な手段だ」

記録が出る。

1308Mか。

「次は天狗使おうかな…」

「マジかよ！すげー面白そう！」

「1300Mってスゲー！」

「個性思いつきり使えるんだ！さすが！」

ああ、そんなこと言うから…

「……面白そう…ね」

「…あ、ヤバイ」小声

「そんな腹積もりで3年間過ごすつもりか？…よし、そうだな。トータル成績最下位のものを見込みなしとして除籍処分とする」

「「「はあああああああああ!?!」「」「」」

「生徒の如何は教師の自由だ。ようこそ、これが雄英高校ヒーロー科だ」
すごい理不尽だなあこの教師。

また話してるけど何を使うか考えていたから聞いてなかった。

第1種目：50メートル走

「化生変化『天狗』」

風を操って自分を運ぶ。

記録は1秒27だった。

大体時速141キロくらいか？怖かった。

第2種目：握力

まあここは単純に

「化生変化『鬼』」

馬鹿力の鬼で行く。

記録は測定器が壊れたからわからない。

とりあえず1位。

第3種目：立ち幅跳び

青山のを見て思いついたことを実践。

「化生変化『がしや髑髏』」

ジャンプしたら骨を地面に突き立ててブースト。

景色が流れていく速度は結構速い。

記録は測定限界越え。その気になったら日本を飛び越えるから仕方ない。

第4種目：反復横跳び

がしや髑髏のままやる。

骨を出して蜘蛛みたいに操作する。

記録は172回

これは3位だった。

第5種目：ボール投げ

「化生変化『天狗』」

風に乗せる。

記録は2092メートル。

これは2位。

って、あ

緑谷が注意受けてる。意外と優しい先生だからヒーローになれない器だと思ったんだらうな。体を壊しまくるヒーローなんてだめだし

まあ大丈夫だらうな。

…大丈夫だった。

第6種目：上体起こし

これは特に思いつかなかったので天狗で行く。

「あああああああああああああああ!?!」

調整ミスって気分悪くなった。

おええええええええええええええええええええええええええええええ

第7種目：持久走

そのままで体を運ぶ。

いやー風の操作は万能個性だなあ。

バイクで走るより速かった。

八百万が2位で俺が1位でした。

最終種目：長座体前屈

これは体の柔らかさだから…

「化生変化『スライム』」

ぐによーんって伸びました。

702センチで1位

結果として21人中1位と…

自分の規格外さがわかるな…

「除籍っていうのはウソな」

「『…?!?』」

「君らの力を極限まで引き出す合理的ウソ」

嘲笑してた…

「あ、化茂野。後で校長室に行け」

…

…

…

…
は？

No. 3 校長先生と化け物

えつと、相澤先生はなんて言った？

校長室に行けって？

俺何かしちゃった？それともなんかさせられるの？

「別にお前の進退にかかわるような話ではないぞ？」

「えつ、ならよかったですけど…何の用なんでしょうか？」

「お前の今の立場についてだ…ここで時間を無駄に過ごしても意味はない。合理的ではないね…」

「サー、イエッサー！」

目が怖いですよ？相澤先生…

と、とりあえず…行かなきゃ

くく side 相澤先生くく

俺があいつ——化茂野を見たのは入試試験の実践演習の時だ。

まず、あいつはほかの受験者よりも早く飛び出していった。

俺自身もこの学校の卒業生だが、俺でも入試の時はすぐに動けなかった。いや、ほか

のヒーローであつてもすぐに飛び出した奴はごく少数。

とはいえ、その程度で評価なんてしない。

すぐに行動できたからなんだ？それが俺だ。

行動できたからと言つて能力が伴わなければこの世界では無駄死にをするだけだ。

ほかのモニターを見てみると歓声が聞こえてきた。

「どうした？」

「アア、イレイザーカ。アレヲ見ロ」

エクトプラズムが答える。

そのモニターには仮想敵のロボットが墓標のように突き立った骨に貫かれた惨状だった。

「異形型の個性か？しかもかなり強力…いや、異形型は骨を飛ばすようなものじゃないか…」

自分の個性で消せない異形型についてはそれなりに調べている。

異形型の個性は基本近接戦闘のものが多い。

遠距離を攻撃するような個性は変形型や発動型のものにしか確認されていない。

ならば、あの受験者は複合発動型が可能性としては高い。

それにしても…

「あれは……ほとんど複数の個性を持っているようなものじゃないか？」

「確力ニ：アノ姿ハ異形型ニ見エルガ骨ノ説明ニナラナイ。ソレニ、風デツブサレタロ
ボハアノ翼ガ関係シテイルヨウニ思エル。ツマリ、少ナクトモ風ノ操作ト骨ノ創造ノ2
ツノ

能力ヲ持ツコトニナルナ」

そのあとあいつの対応について教師全員で会議をすることになった。

そしたら、根津校長が

「相澤君！頼んだよ！」

と言つて俺が化茂野の担任をやることになった。

くく side out くく

「やあ、校長だよ！ちゃんと来てくれたんだね！」

「ええ、まあ。初めまして、校長。それで、何の用で自分は呼び出されたのでしょうか？」

「まあ、そう硬くならずにね」

本当に何の用で呼び出されたかわからないから怖いんだが……

俺の立場つて何だろうか

「紅茶は何でもいいかい？」

「はい。そこまで紅茶にこだわりはないですから」

紅茶は好きだし、好きな茶葉もあるけどこれじゃなきやダメというわけでもない。

「さて、君の今の立場についてだったね…」

「相澤先生からはそう、聞かされていますが…どうということでしょうか？」

「そうだね…君は自分が入試でどんな成績を出したかわかるかい？」

それくらい覚えている。568ポイントだ。

「…ポイントじゃないよ。歴代としての話なんだ。君の成績は正直言ってプロヒーローでもたたき出すのは難しい。歴代でぶつちぎりの成績だ。それ故に君の個性を暴走させないために、相澤君に担任を任せただ。」

絶句した。

まさかそこまで警戒されているとは…

「そこでだ。君に質問がある。いいかい？」

「答えられる範囲であれば答えますが…デリケートな部分は答えませんよ」

「別にいいさ！じゃあ質問するよ。君の個性は上限はあるのかい？」

個性の上限…調べてなかったな。一応、調べていることでわかったことを言えばいいか…

「実は自分にとってもブラックボックスなんですよ。なのでわかる範囲でお伝えします。」

同時発動は3つまで。解釈次第でオールマイトに化けて力を行使できる可能性があります。代償はモノによつてさまざままで発動したときによりやくわかります。上限は代償のものがなくなつたときですね。」

「……………うーん。よくわからないね……………しかし、解釈次第というのが怖いね」

「まあ、容易く都市1つ滅ぼせる力です。加減はしますし、個性の制御を重点的に訓練してきました。……………この力のせいで大切な人たちを失つたので、暴走なんてしませんよ」

そこには少年ではなく覚悟を決めてる漢がいた。

「……………そうか……………君も個性で人生を……………なら僕は何も言わないよ」

きつと個性によつて運命を変えられた者同士で通じるものがあつたのだろう。

くくくくくくくくくく

「疲れた……………!!」

緑谷がひねり出すような声を出していた。

「いや〜疲れたな」

「あ、化茂野君。大丈夫だった？」

「緑谷君、傷は治つたのかい？」

飯田が緑谷の肩をたたいて聞いた。

「うわっ！飯田君！うん、リカバリーガールのおかげで……………」

「しかし、相澤先生にはやられたよ……まさか、教師が嘘で生徒を鼓舞するとは……!!」
うくん。あの人絶対除籍しようとしてたけど……言わぬが花だろうなあ

この後、麗日さんがやってきて緑谷が頑張れって感じのデクになったり、飯田がすごい腕を動かしたりしてた。

No. 4 スマブラ的不利

「わーたーしーがー！」

へア!?

「普通に窓から来た!!!」

…

…

窓からオールマイルトが…

ダイナミック入室かましてきたあ!?

違う、窓から来るのは普通じゃないよお!?

窓ガラスが開いてたのってそれが理由!?

ザワザワ…

「やべえよ。あの入室方法は考えてなかった…」

「流石オールマイルト…!!入室方法まで人と違う…!!」

「窓ガラスは大丈夫なのかしら…?」

「画風が違いすぎて鳥肌が…!!」

「シルバーエイジ時代のコスチュームだ…!!」

なんかいろいろ言ってる…

梅雨ちゃんの心配は杞憂だったけど…心配するのはわかる…

ってそうじゃない!

もうよくわからなくて頭がガガガガガガガガガガガガガガガガ!!

そうだ!素数を数えればいいんだ!

1, 2, 3, 5, 7, 9, 11!

って1は素数じゃなかった。落ち着いてきた…

え?ヒーロー基礎学?戦闘訓練?

わー、一人ハブられるなあ。前々世のトラウマが…

というか、作者ですら俺が2回も転生してる設定を忘れてたり、って謎の電波を受信した気がする…

くくくくくくくくく

戦闘服コスチュームに着替えてグラウンドβに集まる。

え?コスチュームが気になるか?

和服に刀。うんそれだけでしかない。

むしろごてごてしたコスチュームは邪魔でしかないから上半身がすぐに脱げる和服にした。

和服というより甚平が近いな。

組み合わせは原作と変わらない…と思う。

つまり俺は1人だ…

いや、オールマイトに君は1人で挑戦ね、と言われたからだが…

閑話休題

オールマイト、というか雄英の設定よ…

アメリカンすぎてついていけないなあ、おい

俺は最後なので他のはカットで

「あの…先生…」

「ん？なんだい化茂野少年」

「自分の対戦相手って…誰ですか？」

(〽 〽) . . .

「H A H A H A H A …」

「伝え、忘れてたんですね？」

とりあえず威圧する。

「ほ、ほらあれだ！私も教師になったばかりだからね！ミスもするさ！」

「いえ、それ以前の問題かと…」

「おお…容赦ないね君…」

社会人としてどうかと思うが…オールマイトは意外と天然な気がするので面白いや…

それより対戦相手が気になるところ…

「うっ、ヴん。君の対戦相手は…この私さ！」

「「「…はあ!?!」」」

咳払いの後と言った言葉は衝撃的過ぎてみんなが驚いた。

それはありなのか？

「それは…どうなんでしょうか？トツプヒーローと自分では差がありすぎると思うのですが…」

「う〜ん。しかしね、君の成績だとそれもうなずけてしまうのだよ。入試時の成績がダントツ、というか歴代トツプなんだから」

「…オールマイト、なら俺とやらせてほしい」

なんかいきなり轟がやりたいって言い出した…

それを皮切りにやりたいというやつらが何人か出てきた…

いいよ！やってやるよ！（やけくそ）

というわけで俺一人対轟、爆豪、八百万、尾白、切島、常闇、瀬呂の7人で対戦することになる

スマブラで一人だけ狙われる気分だ…

「さて、化茂野少年！防衛側かヴィラン攻略側かヒーローを選んでくれ！」

「はあ…じゃあ、防衛の方が手段が多いので防衛で」

「ではこれが見取り図だ。頑張りなさい」

さて…やりますか

No. 5 防衛戦の方が大体有利

さて…今回は防衛側だけど一人しかいないから迎撃なんてできない。
だからと言って妨害しないのは話にならないだろう…

まあ、手段はあるけどとりあえず…

「化生変化『ミノタウロス』」

一階から三階までを迷宮にするとこちらから始めようかね

とりあえずは広さをいじって個性持ちの魔物つぼい何かを50体ほど放とうか

ゴブリンとリトルウルフでゴブリンライダーを数体（個性：同族同調）

こいつらは大体偵察でいいや…

ほかにはオーガ（個性：豪腕）とかコートリス（個性：石化の呪眼）を10体。

瀨呂対策にグレートマンティス（個性：大鎌）を3体

常闇対策には轟対策も兼ねてラヴァゴーレム（個性：溶岩）5体

あとはめんどいからゴーレムだけでいいや…

~~~~~

「くそっ…こいつら硬い…」



「俺の黒影ダークシャドウはこのマグマみたいののせいではない、ち強くなくなってる。対策は万全と  
いうわけか……」

「あ、あ、あ、!!うぜえ!くそが!なんでぶつ壊れねえ!」

俺たち7人は二手に分かれて突入したがなんだよここは!

渡された地図よりも複雑で広い。いや、見た時よりも確実に広くなってる!これもあ  
いつの個性の一端というわけかよ!

爆豪はイラついてるし常闇はまいち決定打に欠ける。というか、常闇の個性を知っ  
てるのか弱点を突いて弱体化させてるみたいだ

ツ!イテエ!

「なんだこれ!左腕が!」

石みたいになってやがる!あのトカゲみたいなやつ<sup>の</sup>せい<sup>か</sup>?何もしてこないから  
疑問に思っていたが強力な個性だな、おい!

「くそお!全然階段にたどり着かないじゃねえか!どこなんだ」

~~~~~

石でできたやつらを氷漬けにして一息つく。

「ふう。これがあいつの個性か:拠点防衛には使えるがこれだけじゃないんだつたな

……」

「ええ。あの翼の生えた姿に角の生えた姿に巨大化した姿、骨を生み出す力にゲル化した姿。どれも脅威ですわ。それにあれだけとは限りません。未知数すぎて不気味です。」

同じ推薦入学者の八百万が答える。

「うっひー。きついなあ。」

「流石にここまでとは思わなかったよ…」

瀬呂？！尾白？が弱音を吐いているが意外と余裕はありそうだな。

ドゴオ!!!

モンズヌーどもが壁を破って出てくる。

「カマキリ？！にしてはでかいな」

「とりあえず拘束する！」

瀬呂がテープを伸ばす。しかし、光が走ったと思ったら切られていた。

「えっちよ待って!!俺こいつに相性悪いじゃん！」

さらに穴から溶岩でできた人型の存在が入ってきた。

俺に相性がいいやつを最初に出さなかったのは八百万が疲弊するためにか！

「逃げるぞ」

仕方ないから逃げの一手だ。

俺じやまだあいつ自身にすら挑戦できないのかっ！

くくくくくくくくくく

「うん！みんなお疲れさま！そして何だい！あの防衛能力は！化茂野少年の個性の謎がさらに深まったじゃないか！しかも4階の床を全部落とすなんて発想はなかったよ：あれじや上からの攻撃を避けられないじゃないか！」

「予想してたより突破されましたね：3階に来たときは焦りましたよ。拠点防衛は経験がなかったのでもいい経験になりました」

意外と善戦してて驚いた。あそこに来るとは予想してなかったので4階の床を抜いて妨害と攻撃をしたらタイムアップで勝ったけど。

この後講評して帰った。

No. 6 個性って生活に制限がかかることもあるね

にしても昨日は早く帰ったから放課後の反省会に出席できなかつたな。そう思いながら教室のドアをくぐる。八百万とかが中心になって昨日の屋内戦闘訓練の反省会を呼び掛けてたけど昨日はあの人たちの命日だったから参加できなかった。

「うーす。おはよー」

「おはよう、化茂野君。昨日は急いで帰ってたみたいだけど何かあったかい？」

飯田が話しかけてきた。別に隠すことじゃないしいいか。

「あー。昨日は恩人たちの命日だったから、墓参りしてた。まあまあ遠いから電車とか使ってもぎりぎりだったよ」

「む、そうか。ぶしつけな真似をしてしまつて申し訳ない」

「気にしなくてもいい。過去のことだし、割り切つた」

申し訳なさそうな顔をしていたので心配させないために大丈夫ということ伝える。もちろん本当に割り切つてはいるが、殺した奴は捕まえるつもりだ。

「おはよう……」

「なんだ、緑谷。死にそんな顔して」

「オールマイトに関してのインタビューだよ…」

「あー。納得したわ。そういう時は保健室に行かないといけないって言えば、そのケガでも見せれば一発でこっちに來れると思うぞ?」

オールマイトに関して誠実に答えようとしたんだろうな。まあ、ああいう手合いは答えるときさらに別の質問をしてくるから無視が一番なんだが。

「おはよう。おつ、化茂野じゃん! いやー昨日は完敗だったぜ。あつ俺あ切島鋭児郎」

「おう、おはよう。昨日はお疲れ」

「いやーお前強いな。どうしたらそんなに強くなれるんだ?」

「それはわたくしも気になっておりました。あ、八百万 百と申しますわ。あんなに圧倒されたのは初めてでした。何か秘訣でも?」

そんな感じで質問をされた。まあHR始まりそうだったから席に座らせたけど。

「昨日の成績見させてもらった。まあ言いたいことはいろいろあるがまず緑谷。また腕壊したのか。個性の制御、俺はやれないやつにはやれと言わん。死ぬ気で制御してみる。次に爆豪、ガキみたいなマネはすんな。能力はあるんだから。最後、化茂野。詰めが甘い。お前なら本気でやれば一階でどうにかできるだろ」

「うえっ?! いや、個性の把握は完璧じゃなかったたので様子見してたんですけど」

まさかの評価。全員の個性のことを知ってること、わかってんじゃないか? この先

生。

「それでも、だ。個性が発動する前に闇討ちできただろう」

「…オツシヤルトオリデス」

何も言えない…

「まあいい。ここからが本題だ。急で悪いが今日は君たちに学級委員長を決めてもらう」

「…」学校つぼいの来た————！！！！！！

「うるさい。早く決めろ」

おおう…耳鳴りが…というかそんなに学校つぼいことしてなかったっけ？

このあと飯田が多数決を提案した結果、俺、緑谷、八百万の3人が2票で候補に挙がった。

俺は委員長タイプじゃないので辞退した。

そんなこんなで昼食

「すごい、食べますわね…」

今日は緑谷、飯田、麗日、八百万の4人と昼食を食べることになった。

「あく。個性の影響だな。俺の個性って何かしらを消費することになってるんだよ」

俺の前にはステーキ4キロ、パエリア3キロ、ドリア2キロ、サラダ5キロなどなど

総額15,000円超えの食物。

「例えば、がしや鬮體。これはまあわかりやすいがカルシウムを消費する。だから、毎日牛乳を十リットル飲んで。例えば吸血鬼。これは少しづつ血が抜けていく。だから鉄分を取らないと貧血になる。ほかにもいろいろあって、たんぱく質に脂質、場合によつては記憶を消費する。正直生活は苦しい」

「そんなに食べても栄養は溜めておけないだろう？」

「一応常時発動しているものが食べたもののストックができるやつでな。最近常時発動できるようになったからまだストックは少ない」

「私も食べるほうだとは思っていましたがここまでではありません…個性の影響が大きすぎませんか？」

「いや、でもあれだけ強力だと条件があつたりすることが多いからむしろ少ないと思うんだけど…」

「特定条件下でしか発動しない個性の類だと思えばいいのか？確かに兄さんの知り合いにそんな個性の方がいたような…」

個性のデメリットとしては八百万と化茂野は似ている。何かを消費することで発動する強力な個性だ。消費するものの量と種類が桁違いな分、化茂野の個性は桁違いになったのかもしれない。

「それに、一応は金策があるから今のところどうにかなってるんだよ。一応は合法的に稼いでるけど、あの人たちのコネがなかったら非合法に手を出していたレベルの額だな。ほとんど食費に回ってるけど、それでもそこらのサラリーマンより稼いでるからここに入れた」

「ちなみにどこで稼いでるん？」

麗日が目を若干輝かせて尋ねる。

「警視庁の捜査の時とか、八百万の祖父の護衛とか、ある個性のせいでもたまに湧く個性害獣の駆除の時とかだな。個性害獣は緑谷は知ってると思うけど個性によって空いた次元の穴からこつちに出てくるこの世界とは違う組成の個性を持った生物だ。ヒーローの仕事にこれの駆除も入るからやつてみるといいぞ。大抵はトップヒーローよりは弱いが大抵はオールマイイトクラスじゃないと勝てないやつもいるけど」

ある個性を持った男が悪意を持って世界各地にあげた穴によって毎年数万人の人が殺されたり行方不明になっている。その男は逮捕され、死刑にされたが穴は残り続け災害の一つとして認識されてしまった。

閑話休

題

「ちよつと待つて。なんか情報が多すぎてわかんなくなつて…」

緑谷が困惑してゐる。確かに、多かつたな。

「警視庁の捜査つて何？学生を働かせていいの？捜査に協力つてどうやつて？」

「凶悪犯罪の容疑者が黙秘してゐる時だな。個性の限定的な使用の許可が出されてゐるから実は犯罪行為を働かなければ俺は個性の使用に関してお咎めなしなんだよ。町とか破壊しなければな。その代わりに個性を使つて容疑者の心を読んで犯人かどうか調べるんだ。これでいいか？」

これは本当に凶悪な犯罪を調べるときにしか要請されないから月に1回要請されるかどうかだけ、毎月数十万円口封じも込みで口座に振り込まれてゐる。それでも食費代には足りないけど。

「おじいさまの護衛とは一体…」

八百万も珍しいことに驚いている。

「ほら八百万の家つて成功を収めてゐるけどその分狙われる可能性があるだろう？だから国に許可をもらった俺にプロのヒーローと同じ扱いで護衛を頼んでほしい。とかほかの護衛よりも強いから報酬もやばいぞ。数百万とか月にもらつてゐるんだぜ？」

「数百ッ!？」

「いや、でも命の危険があるぞ?」

「あ、やっぱいいです」

麗日が目を輝かせたけど命の危険のことを話したら元に戻った。金を稼いで親に恩返しをしたんだっけ?立派なことだけど考えが足りなかったみたいだ。護衛って命の危険があるから守ってるんだからきちんとして理解しないでやってると痛い目見るんだよな。

「ねえ」

「なんだ緑谷」

「君によく似た人が君の食事を食べてるんだけど、誰?」

横のこいつか。気づかない人も多いけど気づいたか。ということは緑谷は何かしら不幸が起きるな。

「こいつはまあ、俺の《ドツベルゲンガー》だな。気づかないやつは気づかないけど気づく奴は気づくんだよな。気づく奴は今後何かしらの不幸が襲うぞ。つまり緑谷は今後何か起きるからまあ、対処するために強くなれ。不幸が襲うのは確定だし」

「」

緑谷が固まった。すげえ顔www

というか、最近体に精神が引つ張られてる気がする。とはいえ別にどうということ

ないか

そんな時、大音量で警報が鳴った。

No. 7ワザップ真翔

ウウ

!!!

「警報!？」

「ぬお!？」

警報が鳴る。あ、お茶子が味噌汁吹き出した。

「ああ、ほらこれ使え。洗って返せよ」

とりあえずハンカチとティッシュを渡す。

「あ、ありがとう」

感謝を素直に伝えられるのはいい子のあかしだねえ。年寄り臭い? これでも5×歳だからな(精神年齢)

『セキユリテイ3が突破されました。生徒の皆さんは速やかに屋外に避難してください』

機械音が響く。

3つていうと校舎内に誰か侵入したってことか。これ個性の無断使用だよな…? つまり敵か。^{ライオン}マスコミの侵入だけど知らせるべきか? いやでも、原作乖離と化しそうだし

流されとくか。

「校舎内に誰か侵入ねえ。ヒーローいるのに考え足りてないんじゃないか?」

「化茂野君、そんなこと言ってるだけで避難しなきゃ!」

「いや、むしろ危険だと思うぞ?」

「え?」

生徒が押し合いへし合いしているところを見る。だいたい1000人くらいの押しくらまじゆうか。けが人が怖いな。

「それに、ドツペルゲンガーに見させた感じマスコミの奴らの侵入みたいだ」

「何だ?!し、しかし」

「焦ってる中でこれを伝えても聞いてくれる奴は少ないだろ」

「なら目立つように伝えれば…」

「そうだなあ、目立つ場所で声を張り上げればいいんだが…そうだあの出入口とかはどうだ?視点の上だし見やすい」

原作どうりになるように誘導。あ、ドツペルにはスマホ持って行ってもらって撮影してもらってます。後でつてを使って警察やら検察に送ってしよっぴてもらおう。

「そ、そうか!麗日君!」

「何!?!」

あ、唐揚げうまい。外はサクサク、中はジューシー。それでいて脂っこくないしご飯が進む。

「俺を浮かせる!」

「わ、わかった!」

あ、こはん無くなった…取りに行かないきゃ

「これなら…!! エンジン…ブースト!」 DRDRRRRRRR!

「い、飯田くん!?!」

「むおおおおお!?!」

あ、ダメですかそうですか。避難しろと…白米食べたい…これもすべてマスゴミと死柄木のせいだ!

「ドツペル…ちよつと変われ」

ビターン!

あ、飯田が張り付いた。来るぞ(ザワザワ…)

「皆さん…大丈夫!!」

おお、非常口だ…

「お、ドツペルのところと変わったな」

ドツペルゲンガーと俺の位置は帰ることができるから便利なんだよなあ

「さて、こういう時はアレしかないね」

「あなたたちを不法侵入罪と個性無断使用罪で訴えます！理由はもちろんお分かりですね！あなた方がこの校舎に無断で個性を使用し侵入したからです！覚悟の準備をしておいてください！近いうちに警察や検察にあなた方を訴えてもらいます。裁判所にも問答無用で来てもらいます。慰謝料の準備もしておいてください！あなた方は犯罪者です！刑務所にぶち込まれるのを楽しみにしておいてください！いいですね！」

そう、ワザップジョルノのリメイクだ。

「な、何を言って」「これは報道だ！」「これは私たちの権利よ！」「子供が口をはさむな！」

有象無象がなんか言っているがどうでもいい。スマホでも撮ったし警察にも検察にもつてはある。つまりこいつらはジ・エンドだ。

「あなた方のせいで生徒は混乱し外に出ようと狭い出入りに殺到しました。そのせいで転んで踏まれた人もいます。つまり、この混乱を起こしたあなた方に責任はあります！そして、この校舎のセキュリティを突破するには個性の使用が最も効果的です！いいですね！あなた方は先ほども言いましたが犯罪者です！」

つい熱くなる。食べ物への恨みだから仕方ない。

~~~~~

その後。

警察に撮影した動画を渡しマスコミは社会的に死んだ。  
最近のニュースではマスコミの態度についてのものが多くなった。



## No. 8 開幕ブツパこそ至高

彼女は英雄だった。

彼女は勇者と呼ばれる存在だった。

俺は彼女を守る存在ではなかった。

彼女はその身に英雄を宿し戦場を駆けた。

俺は彼女に守られていた。

俺は彼女のおかげで生きてられた。

でも彼女は死んだ。身勝手な理由で。

だから俺は願った。彼女のことを殺した世界に復讐するための力を。

でも、彼女がいない世界はただただ虚しかった。

俺の個性は彼女の対極に位置する力。だから俺は知っている。

彼女の力は世界の均衡を保つためにどこかに存在すると。どれだけかかっても見っ

けてみせる。

~~~~~

こんな記憶持っていないんだよなあ（シリアスブレイク）

まあ、もしかしたら俺の知らない前世の一つかもしれないけど。

というかこの個性の対極ってヤバいんじゃないやね？本気を出せば国なんて消せるレベルだし？その対極ってことはつまり同じくらいの力だもんな。

「おい」

ん？あ、説教受けてんだった。

「お前な？あんなに言ってたこと覚えてるか？」

「え？まだ不確定なのに違法な報道してるかわからないやつらを訴えたことだろ？あれな？『バク』とか使って記憶を読み取ったやつだけだぞ？いろいろアウトなこととしてたしそつちも助かるだろ？」

俺の目の前にいるのは警察のお偉いさん。バーコードすらない頭が眩しい。俺に協力してくれる数少ない権力者でもある。でもまあ、八百万の爺さん、八百万造現だけでも影響力がやばいんだが。

「『バク』つつーとあれか。人の夢に侵入してそれを食うって妖怪だな？」

「こそ。夢っていわば記憶の整理だから記憶を読み取るのが本質だから調べてた。オルマイトが講師として雄英に来る時点で遅かれ早かれああなるだろうからいろんなところのグレーな奴らが侵入したときに備えて毎夜個性で調べてた。おかげで寝不足だぜ？」

苦虫を100匹くらい噛んでコーヒーとソーダを一気に飲んだみたいな顔してる。言つてて思ったけどマズそうだな。

「……………ハア」

「すごく重い溜息だな幸せが逃げるぞ？」

「お前のせいだよ！」

というかこれでも平日の早朝だから早く解放してほしい…。

「まあいい…お前の相手は疲れる。早く学校に行け」

「もうなんか投げやりだな」

~~~~~

「全く…ようやく年相応の面しやがって」

俺は部屋を急いで出ていったあいつの顔を思い出してつい笑みを浮かべる。

「久しぶりに見たが少しは光に触れたのか明るい顔になってたな…」

あいつと出会ったのは、確か4年前

「というかあんなきれいな顔初めてみたぞ」

親代わりに育ててくれたあの2人を殺されて復讐の誓ったのかは知らんが初めて見たときは単純に恐怖を覚えた。なぜなら、己の激情を押さえてはいたが瞳の奥に、悪と闇、憎悪と嚇怒の念。それが渦巻いてヘッド口みたいな印象を受けた。

「まだ、消えてはいないが…それでもあの時より薄まっていた」

その恐怖は、印象は正しかった。遅すぎる個性の発現。その時間を埋めるかのように個性をわがものとし、力をつけた。

「さて、仕事…するか」

あいつが増やした仕事だ。すでに全責任は俺が負うと公言したし、やらなくちゃな  
~~~~~

「飯美味かったなあ。さすがランチラッシユ」

「毎回すごい量食べてるから若干目が死んでたよ?」

「美味いから仕方ない」

こつちも個性という事情があるからな。食べなきや一般人よりちよつと強いくらいに
しかならない。

「午後の実技は何だろうな?」

「さあ? 前回は対人戦闘だったし、今回は個性を伸ばす授業かなって僕は思ってるけど」

「ばっか、お前、今の状況で個性伸ばすよりか別の体験させたほうがいいだろ。例えば捜索とか災害救助とか」

「なるほど、確かに俺たちはいまだ実力不足。ゆえにまずは体験させて今後の方向性を考えさせるといふことか」

「飯田、なんかお前一人称がぶれつぶれだな」

「ぬうつ…そ、そうか」

「やっぱ無理してんのな、すぐにわかるレベル」

「確か飯田といや、インゲニウムの本名だったな」

「知っているのか!？」

「そっち方面にってがあつてな」

「インゲニウム!?!あの大人気ヒーローの!?!」

「そうだ。それが僕の兄さ!規律を重んじ、人を導く愛すべきヒーロー!俺はそんな兄にあこがれてヒーローを志した」

「すごいや!僕にとつてのオールマイトが飯田君にとつてのインゲニウムなんだね」

「俺は…何か大きなきっかけはないんだよな…。ただ単にくだらない理由でヒーローになりたいだけだし」

「ええと…どんな理由だい?」

「教えられないな、これだけは」

「ちよつと暗い理由だからな。教えるべきじゃない」

~~~~~

バスでの描写?ないよ! (無慈悲)

「安直な名前だなあ……」

緑谷、そこは突っ込まないお約束だ。それにこの世界の奴らの名前は大半が安直（殴先生？）

黒い渦が出てきたことを教えとかなきや

「なんだ？」

「あそこの噴水のあれなんですか？」

「はあ？」

振り向いて確認した。まあ敵だけど

「一塊になって動くな!! 13号!! 生徒を守れ!! 動くな、あれは」

「敵だ!!!」

名シーン来たー!!

まあ、敵さんには何もさせないけどな

「化生変化『病魔』、『天狗』!」

肌になんか紫のまだら模様が浮かび上がる。黒い翼が背中から生える。

「動くなつといただらう!？」

おっと、怒られた。だけど、これに関しては何もさせないのが正解だ。

腰の刀を抜く。今まで出番がなかったそれを思いつき

手首に当てて切り裂く！

やっばいてえなあ…

「お前何してる!？」

「化茂野君!？」

「いきなり何を…」

「さて、てめえらの血は何色だ？敵連合!」

血を混ぜ込んだ風を敵の奴ら全員に当てる。もちろん、すべてのフィールドにだ。今の俺の血は死なない程度に弱めた殺人ウイルスが大量に入ってる。

これが『病魔』の能力。俺の免疫力を著しく下げる代わりに病気にさせるすべてのものを血から生み出せる。

「「「「ゴブウツ  
「「「「ゴブウツ  
「「「「  
!!!!!!??????

血を吐いて全員が地に臥した。開幕ブツパ、先制ブツパは至高とはよく言ったもんだ。あ、やば

「ゴハアツ??」

「化茂野くーんんん?!」

どこのグダグダ病弱サーヴァントみたいに吐血した。免疫力が…



## No. 9 季節に關したことはしないうp主

うええ…。口ん中が鉄の味する…。というかダルい…。

「大丈夫かい!?化茂野君!」

「おう。すこぶる大丈夫じゃないぜく…。ものつそいダルい…」

これが「病魔」の欠点、というかこのやり方の欠点だな…。

どんくらいダルいかというと、40度くらいの高熱かつ二日酔いの状態よりもダルい。

「ダメじゃねえか!」

「ナイス突っ込み。切島…。拘束くらいみんなですればすぐに終わるだろうから、ここは俺に任せて先に行け…」

「いや、それ別の場面で言うセリフだよね!」

言いたかったんだ…。仕方ない仕方ない

「化茂野…おい、お前…」

覚悟はできてるんだろうな?」

…あかん。イレイザー怒らせちゃまった。除籍かな…?

「今回は…迅速に対応しようとした結果というのわかる。勝算があったからしたんだろう…。だが…：いまだにお前は経験の足りない『卵』だ。いくら全員をうまく無力化できたからと言ってそれは結果論」

「え、ええまあ。それは理解しているつもりですよ…。ハハハ…。ですが、特にあの脳みそむき出しのあののでかいのはやばいと思つてので無力化しなきゃという思いが先行してしまいました。もしかしたらオールマイトに届く力を持つていると思つてので、つい……」

実際にあの脳無という生体兵器みたいなやつはやばい。あの人たちが殺されるときにも見たが對抗できるのはトップヒーローくらい。相性もあるだろうがイレイザーヘッドや13号では倒せない。素の身体能力で接近されてボコボコにされるのがオチ。「オールマイトに…？どういうことだ…？」

よし、食いついた

「自分は昔…あれと似たやつを見ています。その時はいくら手足を切り裂いても再生する個性に酸素がなくても呼吸できる個性。炎を放出する個性に自信と物体の位置を入れ替える個性…。まあ、ほかにもいろいろです。それに…あいつらには痛覚も感情もない」

「それはっ…：そうか。つらいことを…：思い出させたな…。一つ、質問するぞで」

別に重い雰囲気になる必要はないでしょうに……。やっぱりこの人良い人だな、絶対。  
「どうぞ……」

「ではなぜあれは動かない？再生するんだろう？」

「再生すると同時に細胞を崩壊させてるんです。あれだけは特別に強いウイルスを感染させましたから」

あれ？なんでみんな引いてるの？

「化茂野……お前……えげつないな」

「化茂野さん……その、なかなかヒーローらしくないといえますか……」

おっと、推薦の二人？お前らは引かないと思っただけぞ？

「ケロ……。怖いわ化茂野ちゃん」

「なんつーか、俺じゃ考えても実行できないぜ……」

蛙吹さん……信じてたのに……。上鳴、お前は考えても、って言ってるあたり考えつくか怪しいってことなのか？それにお前の持ち味はブツパだろうに？

「……なんだよ……。俺の味方はいないのかよ……。文字通り血反吐吐いて頑張ったのに」

これはだいたい俺の心に響く……。今は止血して生命力の高い「鬼」に変化してるからそんなに影響はないけど

「ああ!?なよなよしてんじゃねえよ糞ナード2号！」

地味に久しぶりの発言だね、爆豪。(メメタア)

「てめーは勝った。それでいいだろ!？」

「えっと、ありがとうな、爆豪…。慰めてくれて」

「てめーを慰めたわけじゃねえ!俺の超えるべき壁が勝手にふにやつとなりそうだったから活入れただけだ」

この世界の爆豪って俺がいたからかだいぶ柔らかくなってんだよな

「何か…爆豪君って思っていたより優しい?」

麗日。お前の発言でこの凍った空気は助かった!ありがとう!

〃〃死柄木side〃〃

くそつ

くそつ

なんで俺が、脳無が、倒れている!動けない!?

ここまでの化け物だとはあいつには聞いてないぞ!?

「黒霧つ!あれを使え!」

先生に渡されたあの薄気味悪い生物を黒霧に使わせる。あれが使えるのはワープだ。

黒霧は体を霧で覆うだけで精一杯らしい。こんな時に使えねえな!?

「は、い…。死柄木 弔…」

とりあえず、俺たちは助かる…。

だが…

「今回は完全敗北…：かよ!?あのガキ、絶対殺す!」

肉体が黒い泥に沈む。次は殺せるやつら全員で鬨り殺す!

首を洗って待っている!

「諸星、真翔っ!」

くく化茂野sideくく

「諸星、真翔っ!」

え…。なんで俺の、前々世の名前を…

「イレイザー!」

「わかっている!」

13号が叫び、相澤先生が個性を止めようとした。けど

「本体は、どこだ!」

相澤先生の個性は本体を把握しないと発動できない。黒霧の個性を消せなかった理由もこれだ。

脳無と黒霧、死柄木だけがUSJから消え、入れ替わるように…

5体の脳無が現れた

・  
・  
・  
・  
・  
あかん。今の状態じゃ勝てんわ  
・  
・  
・